Hiphop の文化としての浸透

About the infiltration as culture of Hiphop

1K05B007

足立 洋輔

指導教員

主査 寒川恒夫先生

副査 太田章先生

【研究目的】

現在世界の音楽界に多大な影響を与えている Hiphop という音楽はなぜここまで影響をあたえるようになったのか。そして、Hiphop が文化に変わっていった今、なぜ一つの小さなコミュニティの人種から発信した音楽が他の場面でも浸透し文化になろうとしているのか。という疑問があり、調べようと思う。

【研究結果】

Hiphop はゲットーと呼ばれているニューヨークの黒人街で生まれた。もともとは奴隷制度があった時代からアフリカ系アメリカンの間で行われていた“ダズンズ”という言葉遊びが、年月が経つにつれて他のジャンルの歌の変わりに Hiphop の中に、“ラップ”という形に変わっていた。そのラップの後ろに流れる音楽は DJ がレコードをかけている。Hiphop が始まった頃はブロックパーティが盛んに行われ、DJ が主役であったが、レコードを変える間や間奏の部分でラップを始め、次第にラップが主役となっていった。DJ のレコードを多彩に操る技術はジャマイカ出身のアフリカ系アメリカンが始めたとされ、アフリカから買ってこられた奴隷の“ダズンズ”とジャマイカからのレコードの技術があわさって Hiphop が生まれた。

なぜこのようにして生まれ始まった小さな音楽がここまで世界の音楽をリードするようになったのか？それはまだアメリカで、有色人種の差別や迫害がひどかった時代に、どうやって自分たちを表現するのか、どうしたら表現できるのか、と言った考えがあり、それまで表現できなかったエネルギー

ーが爆発した結果だと言える。しかし現在に至るまでに Hiphop は大きな社会的マイナスのイメージも作っている。黒人が多く住む地域には必然的にギャングの存在があり、Hiphop も必然的にギャングと一緒に成長していった。Hiphop が始まった当初から Hiphop に暴力は必要なく排除しようという運動が多くあった。1996 年には東西 Hiphop 抗争が大きくなり、有名アーティストが銃撃され死亡した事件もある。これを気に半暴力運動はよりいっそう強くなっていった。しかし、現在でもアーティスト同士の抗争は多く存在し多くの逮捕者、犠牲者を出してしまっている。

Hiphop が始まってからはまさに爆発的な勢いで全米に Hiphop が広まっていた。始めは黒人の音楽だったのがいつしか、白人のファンを増やし音楽としての立場を強めていった。当然時代が過ぎるにつれ、音楽だけでなく政治、教育の場にも Hiphop は進出している。社会的マイナスもあるが、必ずしも Hiphop 全てではなく一部の存在にだけよるものだ。それを払拭するため多くの Hiphop に関わる人たちが政治や教育、ボランティアの場面で活動している。最近では次期アメリカ合衆国大統領にオバマ氏が当選した。これは単に社会的流れかもしれないが、若い人や今まで投票してこなかった人を投票に向かわせるきっかけとなっていた。教育の場面でも格式ある大学で Hiphop が正式なカリキュラムとして認められた。これは教授が必死になり Hiphop の歴史的背景、音楽の芸術性を認めさせた結果である。

今までは研究対象として Hiphop が選ばれるこ

とは少なかったがこれから先は恐らく増えていくであろう。だが Hiphop を研究する際気をつけなければならないのが、研究室で必死に Hiphop を聞き、本を読み研究しても誰も認めようとししないのが Hiphop である。Hiphop はすでに文化になりつつ

あるし、Hiphop は現場の支持を得られるものでないと Hiphop ではないのだ。エジソンがライトを発明したように、誰がいつ作ったというものでなく民衆が皆で自然発生的に創りあげたものなのだ。